

天界の玩具

乳牛天使



これは、冥界の乳牛奴隷天使が
まだ天界で恋人の天使と暮らしていた頃のお話。

「ああ…ッ、やだ…こんな格好…」

縛ったりしなくても…私はあなたから逃げたりなんてしないのに…」

「なあに、雰囲気作りだよ。たまにはこういうプレイもいいたろう？」



「恥ずかしい…から…もつと、普通に…あつひんッ」

「くく、ニプレスを剥がしただけでなんだこのミルクは？」

「はあ…あ…」

「コ」も…ゆるゆるに

涎を垂らしてるぞ？こんなにされて悦んでるのはお前じゃないか」

「あはあ…あ…違…ソコ…広げ…ないてえ…あんっ…」



「ゴゴはイヤだったって？だったら、アナルから可愛がつてあげようか。
しつかり集中できるように、目も塞いでしまおう」

「やッ…あ…あ」

「どんどん飲み込んでるぞ？食欲なカラダになつてきたなあ、いい子だ」
「あ…くう…フツ…だつて…あなた、の、したい…ことなら…あんっ、わたしは…
なんでも…ひっ、受け入れ…ます…から…あひいあっ」



「そうだな。…お前の望みは何だ？」

「わたしの…んひつ、望みは…あなたの、望みを…叶えること…あはあんツ」
「いいお返事だ」

「んむう…!？」

「じゃあ早速叶えてもらおうか。今日は、自由を奪われ、何も抵抗できない
雌牛…いや、性人形として、私の精を存分に受け止めてもらうよ」
「んん、んうう…う…ふあう、う、んん」



「ふふ、アナルパールがナカでゴりゴりつて当たって…気持ちいいよ」
「んふう、ふあう…！んもつ、おッ♡んぐう…ううんッ♡」

「こうされた方が積極的になれるようだな？あられもなくいやらしい声をあげて、
ふるんふるん乳を揺らして。それじゃ、まず一回目。めいっぱい注いであげるからな」
「んあひいっ、おッん…！んむッ、んあひいっんッ…♡♡♡」



「ふう…。両穴ともすっかり私のカタチになったな。最後の方はずっとイキッぱなしになつてたみたいじゃないか。ぎゅうぎゅう無遠慮に締め付けてきて…。困った奴だ」
「んっ…ふう…う…」

「お前の望みが私の望みを叶えることなら…。その豊満なカラダすべてを私に捧げていつまでも私を愉しませてくれよ。お前も嬉しいだろう？」

「…んむ…う…ふあ…いひい…♡」













